
ヴァンパイア・ハウス

大月 泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴァンパイア・ハウス

【NZコード】

NO925A

【作者名】

大月 泉

【あらすじ】

ごく普通の女子高生、弥保光の家の隣にある西洋風の大きな怪しい屋敷。その怪しさのせいで、隣に住む光までもが怪しい奴扱いを受け、腹を立てた光はついにその屋敷を訪問し謎を解き明かそうとするが・・・

第一話「扉」

私はこの町に最近越してきた女子高生、弥俣

光。
やまた
ひかり

目立つ要素も無ければ、地味な要素もない。至つて平凡で普通な高校生である。

しかし。

そんな光に、一つ気掛かりな事があった。

それは光の越してきた家の隣の大きな屋敷だった。

西洋風の造りで、その屋根には何匹ものカラスが止まつていて仲間を呼ぶかの様に鳴き続けている。

怪しいのはそれだけじゃない。

その屋敷の窓にはカーテンがビックシリ閉められており、更にそこから人が出てくるのを誰も見た事がないという。

その話は学校でもちよつとした話題になつて、若者達を騒がせていた。

そして迷惑なことに屋敷の隣に住む光は、一部のオカルト好き生徒から

「あいつは屋敷の中にいる魔王の使いだ」「本当は屋敷に住んでいる魔女だ」

等とひどい扱いを受けているらしい。それに腹を立てた光は友達を連れて、今度その屋敷を訪ねようと約束していた。

そして、今日がその約束の日である。

光は幽霊やオバケなど、ちゃんと解明されていないものを信じる方ではなく、

今回の件に関しても「怖い」という感情が少なかつた。

むしろ好奇心旺盛な光は、屋敷内の探検にワクワクしている。

暫くすると友達の「麻美」と梨恵がリュックを背負い、

懐中電灯を片手に待ち合わせ場所の屋敷前へとやって来た。

「遅いよー。待つたんだからねー」

光が愚痴をこぼした。

「ごめんごめん、歩きながら屋敷の話してたら

盛り上がりっちゃって・・・ね？」梨恵

「そ、遅れて来たのは悪かつたわよ」

二人は光に謝つたが、どうやら光はご立腹だ。

「・・・ま、この借りは今度返してもらうとして・・・

そろそろ屋敷内へレッツ「ゴーよつ！――！」

「おー！」

光、麻美、梨恵の3人は鴉の羽が散るどこか不吉な屋敷へ、恐怖という名の緊張感を持つて入つていった。

ギ、ギイイイイイイイ・・・・

錆び付いた扉の蝶番ちょうつがいが、何かの生き物のような

音をたてながらゆっくりと開いた。扉を開くと真つ暗な屋敷内に一筋の光が差し、

三人の目の前を照らしだした。

「真つ暗だねー・・・」

光はそう言つて屋敷内を見回すと、玄関から続く廊下の先にもう一つの扉が有ることに気づいた。

「一重、扉・・・・？珍しいね」

「防犯対策かな？」

「でも、鍵かかって無かつたよ？」

三人は一重扉の謎を推理しつつ、廊下を進んだ。

その間に、2m近くあつた大きな屋敷の扉はバタン、と閉まった。

「わ、きやー！真つ暗ー！」

光が騒ぎ立てる。

慌てた梨恵と麻美は手に持つた懐中電灯のスイッチを入れた。

「ひ、光にびっくりだよー・・・いきなり大きな声出さないで！」

梨恵は心臓を押さえて驚きをなだめている。それはさすがの光も同じだった。

そして、もうひとつ扉の前。

「ふう・・・まさか三重扉ではないよね？」

光は扉の持ち手を掴みながら言った。

「あれ、張り紙がしてあるよ？」

扉に張つてある小さなメモ書きに気づいた麻美は、懐中電灯でその張り紙を照らして朗読した。

「ええと・・・『御用の方は扉右手にござりますベルを鳴らしてからお入りください。』・・・だつて」

梨恵が言われた通り扉の右側を照らす。

すると確かに、まだそんなに古くはない金属製の大きな鐘がフック引つ掛けられていた。

「これ、鳴らすのね」

光がベルにくつついた紐を動かすと、からんからん……と大きな金属音が屋敷中にこだました。

第一話 「二人」

「これで……いいのよね？」と、入る。「うなずいて、扉の持ち手を照らした。光はそつと手を掛け、胸の高鳴りを押さえながらゆっくりと向こうに押し押しした。

「…………」

さつき通つた入り口の様な音が、また鳴つた。
ここも油を差していないらしい。

扉がゆっくりと開き、屋敷内の部屋がゆっくり見えてきた。その時
点で確認できたのは、
木造のテーブルと赤いじゅうたんだけ。
光は思い切つて扉を押す。

扉は全開になり、屋敷のエントランス全体が見渡せた。

様々な意味で、「すごい」部屋だった。見ればわかる。
天井には、明かりは小さくもダイヤモンドなどが高貴に飾られている
シャンデリア。

室内にも関わらず、部屋の中心で水流音をたてている噴水。
大理石で作られた、大きくカーブした階段。

まるで19世紀の西洋の城にいるような気分だった。

「な、なんな訳？」「レ……外見から見た通りの西洋風屋敷じゃ
ない……」

光は驚愕して、ただ呆然とその場に立ち尽くしていた。

「す」「いね・・・・あれ？」

麻美がある事に気付いた。3人が、この屋敷にびっくりしている、一瞬の隙だつた。いや、

性格には驚いていたのは「2人」、だ。・・・・そう。梨恵が消えていた。

「梨・・・恵？」

麻美は少し震えた声で梨恵の名を呼んだ。返答は無く、部屋の噴水の流水音が空しく聞こえる。

「悪戯やめてよ、ねえ・・・・シャレになんないじゃん！」

麻美は梨恵の名を呼び続ける。やはり返答はない。すると部屋に立ち尽くした光が、静かに言った。

「・・・見て、あれ」

光の指差した先には、さっきまで確かに梨恵の持っていた懐中電灯が転がっていた。

「・・・・・・！」

麻美は顔を青くして、光の腕に抱きついてきた。

「麻美、さっきまで確かに・・・・梨恵は私達の後ろにいたよね？」

麻美は声を出さず、ただうなずいて答えた。

「・・・・・・・怖い、けど・・・・梨恵を見捨てて帰れない。麻美も、そうだよね？」

光はまだ少しぼうつとしていたが、光の瞳にはどこか、大きな決断をしたような強い意志があった。

麻美も光に抱きついた腕をほどき、懐中電灯を正面に照らした。光とともに進む決心をしたようだ。

第二話 「二人」（後書き）

お楽しみ頂けたでしょうかー。

私としてはホラーは初挑戦なんで

変な所は無いか心配中です(、ヽ、ヽ；)

推理書きたいけどしぼる知恵が無いんで・・・^^(；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0925a/>

ヴァンパイア・ハウス

2010年10月11日04時28分発行